

死者の声はどう届くのか

——『埋葬と亡霊』その後（上）

森 茂起

「今では記憶していない無数の他者たちから呼びかけが届いていたであろう。私が責任をもつて応えたか否かは別にし
て。」⁽¹⁾ 港道隆

（1）亡霊再訪

文芸批評において、死者との関係を主題とする議論を一つの学として hauntology と呼ぶことがある⁽²⁾。英語で hauntology、フランス語で hantologie と表記されるこの言葉の起源は、「亡霊 (ghost)」を哲学的思考の概念としたジャック・デリダの『マルクスの亡霊たち』⁽³⁾にある。ただその思考の発展には、それに先立ってすでに展開されていた、フランスの精神分析家、ニコラ・アブラハムとマリア・トロークの仕事と、彼らの仕事とデリダの関わりが少なからぬ意味を持っている。『マルクス

の亡霊たち』より二〇年ほどさかのほる彼らの仕事と hauntology の関係は、しかし、二人が提示したアイデアのデリダによる吸収と発展といった直線的なものではない。アブラハムとトロークの仕事とデリダの仕事は、hauntology にとつて、「独立し、相互に関係し、ある程度は共約不可能な二つの起源」⁽⁴⁾である。

アブラハムとトロークは、ハンガリー人としての「同胞のサンドール・フェレンツイの発想に強い影響を受け、個々の人間精神の傷・苦痛・外傷の近くに留まり、それらを言語化し苦痛を緩和する可能性を探求することを精神分析の第一の課題とする」⁽⁵⁾ 分析家である。筆者は、フェレンツイの業績に多くを学び、日本への紹介の仕事に携わるとともに、アブラハムとトロークの『狼男の言語標本』⁽⁶⁾の翻訳作業にも参加した経験から、また、戦争が個人にあるいは社会にもたらす外傷的作用、特に戦争が残す喪の仕事の社会的作用に関心を持つことから、亡霊の概念に関心を持ってきた。外傷を主題としてかつて編んだ叢書を、『埋葬と亡霊—トラウマ概念の再吟味』⁽⁷⁾と題したのもそのためであった。同書「まえがき」に記した趣旨から引用すると、「埋葬と亡霊」というイメージを用いたのは、

「トラウマII傷」というイメージのある種の狭さ、傷というイメージの表層性がトラウマ理解の一つの障壁となり、概念

が希薄化する要因ともなっているのではないかと考えたからである。トラウマはかつて埋葬されながら繰り返しよみがえろうとすること、また常に埋葬され続けていながら現在の人間の在り方を密かに決定していることを示そうとして選ばれた言葉である⁽⁸⁾。

同書では、臨床学と人文学のさまざまな領域にわたる研究者にこの言葉を投げかけて執筆を依頼し、副題に掲げた「トラウマ概念の再吟味」を試みた。個人間の暴力から戦争に至るまで、多様な外傷的出来事をもたらす多様な作用について、臨床学と人文学の共同によって議論することは今後も重要な課題であり続けると筆者は考える。その際、広範にわたる「外傷的」現象を切り取るための概念規定が欠かせない。もっとも直接的に外傷的事態を定義しているPTSDの診断基準は、「実際にまたは危うく死ぬ、重症を負う、性的暴力を受ける出来事⁽⁹⁾」と対象を規定しているが、臨床実践に限っても、外傷概念で捉える出来事の範囲ははるかに広範である。人間関係に起因する「関係性トラウマ」⁽¹⁰⁾を引き合いに出すまでもないであろう。

「亡霊」の概念は広範な現象をとらえるために示唆に富むと思われるが、叢書におけるその使用は、あくまで叢書を統合する「イメージ」としての借用であって、アブラハムとトロークの仕事や、デリダの「亡霊」の議論を厳密に扱うことを目的と

したわけではなかった。アブラハムらの議論を外傷論の見地から再評価するには、彼らの議論を綿密に読み込む作業が必要である⁽¹¹⁾。いつかは取り組みたいと考えながら現在に至ってしまった。

ここに彼らの「亡霊」概念を取り上げる小論を書くことにした背景には、港道隆氏追悼号⁽¹²⁾という機会はもちろんのこととして、一冊の書物との出会いがある。hauntologyを主題とするコリン・デイヴィスの著作 *Haunted Subjects: Deconstruction, Psychoanalysis and the Return of the Dead* である。喪の主題への関心から亡霊が登場する映画に関心を持っていたところ、この書が、まさに映画を含む芸術における亡霊の主題を取り上げていることを知った。そして、アブラハムとトロークの亡霊論と、それを受けた、あるいは受けることを避けた、デリダの亡霊論の比較検討が同書の最も重要な仕事の一つであることも知った。アブラハムとトロークの亡霊論がよく知られているとは言えない日本において、この書物の紹介によって本領域への関心を高めることができれば、それだけでも価値があるだろう。デイヴィスの論を辿る作業ではデリダとの異同を扱った箇所も紹介せねばならないが、言うまでもなく、本論の目的は、哲学の議論に踏み込むことではない。臨床家として、フェレンツイに関心を持つ精神分析の学徒として、現在の外傷論に彼らの仕事を接続することである。その上で、可能な限りにおいて、外傷

論から見たデリダの立ち位置を確認することも試みたい。

(2) アブラハムとトロークの埋葬室¹³、そして亡霊

ニコラ・アブラハムとマリア・トロークは、正統フロイト派とラカン派の対立構造の下で動いていたフランスの精神分析界にあって、どちらにも属さず独自の学を展開していった分析家である。二人とも、ハンガリーを出自とすることから¹⁴、精神分析におけるいわゆるハンガリー学派の文脈に位置づけることができる。ハンガリー学派の起源は、言うまでもなく、シャール・フェレンツイの仕事にある。フロイトともつとも親しい分析家として、精神分析の概念形成過程で大きな役割を果たしながら、晩年に、外傷要因の再考と実験的な臨床実践によって独自の路線を歩み、精神分析の傍流を形成したフェレンツイである。ハンガリー学派は、彼を中心にブダペストに形成された分析家グループを総称したものであり、亡命先での彼らの活躍もこの呼称の下で語られる。そこには、イギリスに亡命したマイケル・バリント、ハンガリーに留まったイムレ・ヘルマン、アメリカで活躍した、シャンドア・ラド、ゲザ・ローハイムなど、多彩な分析家が属しているが、必ずしも一つの学派としての理論的まとまりがあるわけではない。ブダペストでフェレンツイと時を共にし、何らかの影響を受けているところが彼らを

総称する所以である。

ブダペストでフェレンツイに直接接して分析家となった分析家たちと異なり、アブラハムとトロークは、自らの学問形成以前にハンガリーを離れパリに亡命した世代に属する。したがって彼らの仕事へのフェレンツイの影響は、分析家としての自己形成過程における再発見に由来している。彼らが自己形成を行い、活躍した一九五〇〜六〇年代は、ジョーンズの『フロイトの生涯』¹⁵が登場し、強い影響力を持った時期と重なる。フェレンツイは、一九二〇年代後半から一九三三年の死に至るまでの過程で、フロイトとの齟齬が拡大し、死後も、特に晩年の功績は、忘れられていた。その傾向に拍車をかけたのが『フロイトの生涯』であった。ジョーンズはそこに、フェレンツイの精神が晩年に破綻を来していたと記し、その「フェレンツイ発病説」¹⁶は、英国におけるバリントの反論¹⁷にもかかわらず学界に定着していった。

英米でそうした傾向が続く中で、フランスでは、ジュディット・デュポンを中心にフェレンツイをフランス語で紹介する試みが続けられていた。アブラハムとトロークもまた、ハンガリーを母国とする分析家として、ハンガリー学派再評価の仕事に携わった。ただし二人によるフェレンツイの仕事の読解は、彼が残したアイデアの中にホロコースト後の分析家が直面した課題を解くための道具立てを見出そうとする創造的読解と言うべき

ものである。

アブラハムとトロークの仕事を世に知らしめ、デリダによって哲学の議論へと結び付けられた概念は、『狼男の言語標本』において駆使された「埋葬室」および「埋葬語」、そして「狼男」以後に用いられた「亡霊」である。狼男の病因を彼が幼年期に目撃した両親の性交場面という「原光景」に求めたフロイトに対し、二人は、狼男の姉に対する父親の性的虐待という「外傷」に求めた。その読みなおしは、フェレンツイにならって神経症の病因を外傷に求めることを意味すると同時に、狼男自身の外傷が神経症の成因ではなく、姉の外傷が弟の中に「体内化 incorporation」されることで神経症を生み出すと考える点で、さらに外傷概念を拡大するものである。そして体内化された外傷的要素の置かれる場所を彼らは埋葬室と呼んだ。

埋葬室の概念は、意識の手に届かない場所でありながら、たしかに存在する場所として、しかも他者に起源をもつ場所として、心の局所論に加えられた一つの審級ともとれる概念である。しかし、アブラハムとトロークは埋葬室を、心の発達途上で必然的に発生する審級として位置づけるわけではない。それは、特異な外傷的出来事によって生み出される特異的現象である。そしてその発生が言葉を紹介したものと考えると彼らの理解の要である。つまり、外傷的出来事に関わる言葉が、それと連想関係を結ぶ言葉も含めタブー語となり、他者に受け継がれ

る。そしてそのタブー語と音韻的関連を持つ一群の言葉に、タブー語の連想関係による特殊な負荷が生じる。それらの言葉は、タブー語を指し示すのではなく、タブー語を露わにしないために用いられる。彼らはそれらの言葉を埋葬語と呼ぶ。そして、一群の埋葬語が発生することによって生まれる領域、原象を隠している領域を埋葬室とよぶ。こうした理解が、抑圧を鍵概念とするフロイトの局所論より、解離の概念になじむことはすでに指摘したことがある⁽¹⁸⁾。なぜなら埋葬室に収められており、埋葬語によって隠されている原体験は、意味あるものとして体験されたのちに抑圧を受けるのではなく、意味を生み出す以前に、意識的にとらえうる体験となる以前に、通常の心的生活にとつて接近不可能な形に隔てられるからである。

彼らは『狼男』の執筆段階でまだ「亡霊」の概念を用いていない。しかし、後に「無意識のうちににおける、他者の打ち明けられない秘密（近親相姦、犯罪、私生等）の働き」⁽¹⁹⁾と定義された「亡霊」概念を用いるならば、狼男は、それと知らないまま、姉が経験した外傷体験の働きの「亡霊」に取り憑かれていたのである。

この読みには、外傷概念を「秘密」の問題へ拡張する意味がある。彼らにとつては、その「秘密」こそが外傷的作用を構成する。その意味では、外傷の問題系よりむしろ、フェレンツイ

による「取り入れ」と「体内化」の概念的区別による無意識から無意識への直接的作用の理解が主題であり、外傷の語は、むしろ主題化されず、状況に応じて使われているにすぎない。あるいは、外傷神経症という一つの特異な障害における亡霊の働きを論じる際に問題化されるに過ぎない。したがって、「神経症の病因における外傷要因を今まで以上に重視しなそう」⁽²⁰⁾とはつきり謳う後期フェレンツィとは扱う問題領域が異なるとも考えられる。

しかし筆者はここで、彼らが扱う「亡霊」の問題系も外傷論の一部として扱いたい⁽²¹⁾。それは、「秘密」の内容を構成するのが個人に降りかかる異常な事態としての外的出来事だからであり、それを含み得るものとして外傷を定義することが可能と考えるからである。次の定義は、ある心的外傷学のテキストで与えられているもので、私自身が多くの場合参照枠として用いているものである。

心的外傷とは、脅威的な外的要因と個人の防衛能力の間に重大な落差が生じる体験であり、そこには絶望感と抵抗放棄が伴い、そのため自己と世界への理解に持続的な混乱を引き起こす⁽²²⁾。

アブラハムらが主題化する「秘密」が、何らかの外的事象に

発する倫理的崩壊の危機に由来するものであることを考えると、その危機をこの定義における「脅威的な外的要因」と見なしてよいだろう。そうした倫理的危機という外的要因についても、個人はそれを適切に扱い、後に禍根を残さない形に収める力を備えている。その力を「防衛能力」とすれば、「秘密」は、その力をはるかに越える深刻な倫理的危機の発生によって「絶望感」「抵抗放棄」が生じた結果であると理解できる。「自己と世界への理解に持続的な混乱」が起こるという記述も、狼男のさまざまな困難、アブラハムらが「亡霊」の概念によって記述するさまざまな現象に対応している。

次に、すでに触れたように、『狼男』の読みはもう一つの重要な外傷論の拡張を含んでいる。それは、個人を超えて、無意識を介して他者へ引き継がれる外傷的作用であり、「亡霊」概念はそれを亡霊の憑依として理解するのである。狼男の場合、姉から弟への外傷の伝達であるが、多くの場合親から子への伝達こそが問題であり、外傷の世代間連鎖と呼ばれる事態に相当する。外傷論において世代間連鎖は、暴力性の連鎖によって説明されることが多いが、この理解は、「秘密」の作用が、その存在を知らないままに次世代に受け継がれる現象に理解を拡大することを可能にする。そして、そのようにして受け継がれた作用も、先の定義からして、子どもにとって外傷的であると考えられる。その作用は、子どもが理解し消化し、健康な形で取

り入れて成長に資する力をはるかに超えているが故に外傷的であり、その結果「絶望感」「抵抗放棄」、すなわちなすすべのない状況に子どもを追いやる。ここで彼らの理解の要点は、その作用の起源を子どもは全く知らないことである。それは、フロイトの「抑圧されたものの回帰」としての外傷的作用²³ではなく、一度も認識されたことのないものの作用である。したがって、「絶望感」「抵抗放棄」は、事態を認識した上でのものでではなく、対象のない被圧倒感を示している。そして、そこから生じる接近不可能性と、接近を阻む埋葬語^{クリプティム}の数々による混乱は、「自己」と世界への理解における混乱」を意味する。

存在を知らない事態による混乱という点で、この論は、フェレンツイの外傷論の範囲を超えている。外傷要因の重視、すなわち「ヒステリー研究」の外傷論への回帰を精神分析に求めたフェレンツイは²⁴、フロイトが、「ヒステリー症者は、主に回想に病んでいるのである」²⁵と表現した理解を正確に受け継ぎ、「想起」の実現を治療目標としていた²⁶。しかし、アブラハムらが想定した「亡霊」は、忘却の結果でもなく、現在忘却されているわけでもなく、言語使用のある種のあり方によって発生する無意識から無意識への通路を通じた他者の秘密的作用である。子どもが知らない前の世代の体験が、世代を超えて子どもに作用する外傷の世代間連鎖をも射程に置く理解である。

「亡霊」の語によって、外傷＝秘密の世代を超えた伝達という事態を捉えたアブラハムとトロークは、シェイクスピアの『ハムレット』をこの理解に基づいて読み解いている²⁷。『マルクスの亡霊たち』において同じく『ハムレット』を読み解くデリダとの関係を考える上で重要な仕事である²⁸。アブラハムらはシェイクスピアの『ハムレット』には存在しない第六幕を創作し、父の亡霊がハムレットの前に姿を現したのは、何かを明かすためではなく、父が犯した殺人が明かされることを妨げるためであったと理解する。ここでの外傷的事態は、犯してしまった殺人であり、そこに含まれる倫理的侵犯である。それはあつてはならない行為であり、父の倫理的存在基盤を崩壊させる。父の亡霊は、息子のハムレットにまだ認識されていないその事実を「明かす」ためではなく「隠す」ために現れるというのが彼らの理解である。

この理解は、通常の、常識的な、馴染みの、亡霊の理解と正反対である。ふつう私たちは、霊が何かを語ろうとすれば、それは何かを「明かす」ためであると理解する。死者の悔いであれ、誰かへの恨みであれ、まだ知られていない事実を伝え、己の潔白を証明したり、己を陥れた悪事を暴いたりすることが亡霊の意図であると理解する。つまりは、埋葬語^{クリプティム}のベールを剥ぐために来ると考える。しかし、アブラハムらによれば、ハムレットの父は、自らの悪事がばれることを妨害しようとする。つま

り、埋葬語クリプトニムのベールをさらに厚くするためにハムレットの前に現れるのである。逆に言えば、そのベールが息子の努力によってぎとられるのではないかという危機感がその背景にある。父の亡霊は、外傷がもたらす「自己と世界への理解の混乱」の内部にあり、それを深めようとする。つまりは、外傷的作用の一部である。

アブラハムとトロークは、個人史を含む歴史的対象への深い関心をフェレンツイと共有しながら、フェレンツイとは異なる問題領域を「亡霊」の概念によって開拓したと思われる。以下、デイヴィスによるデリダの埋葬論との比較検討を紹介したうえで、アブラハムとトロークの「亡霊」の概念の射程をさらに検討しなければならぬ。予定としては、彼らがフェレンツイの議論を参照しつつ、自我を豊かにする「取り入れ」と、自我にとっての異物として変わらず存在し続ける「体内化」を区別したことを今一度確認したうえで、フェレンツイが晩年に個人への直接の暴力を考察の対象として「攻撃者との同一化」の概念を提出したことと、彼らが「亡霊」の概念を用いて他者の外傷的作用に注目したことの相互関係を検討することになるだろう。

註

(1) 港道隆「他者の外傷、他者の言語」森茂起編『トラウマの表象と主体』創元社、二〇〇三年、一八九頁。

(2) Colin Davis: *Haunted Subjects: Deconstruction, Psychoanalysis and the Return of the Dead*. Palgrave MacMillan, 2007, p. 8. Hauntology は、「存在論 Ontology」と対比して「存在するのでもないものでもない」ものを考える営みとしてデリダが用いたことから、主として哲学の世界で「憑在論」と訳されている。しかし、精神分析家としてのアブラハムとトロークの文脈の中に置き、かつ文芸映画における亡霊を考察の対象にするとき、むしろ「憑依学」がなじむようにも感じる。定訳を用いるのが本来であるのを承知した上で、本論では「憑依」の念意も伝えるため、英語表記を用いる。

(3) ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち―負債状況Ⅱ』国家、喪の作業、新しいインターナショナル』増田一夫訳、藤原書店、二〇〇七年。

(4) *Haunted Subjects*, p. 8. (筆者訳)

(5) 大西雅一郎「表皮と核」訳者あとがき」ニコラ・アブラハム、マリア・トローク『表皮と核』大西雄一郎、山崎冬太監訳、松籟社、二〇一四年、五二五頁。なお、筆者は Sandor を、ハンガリー語発音を尊重して「シャインドル」と表記しているが、引用では

引用元の表記に従う。

- (6) ニコラ・アブラハム、マリア・トローク『狼男の言語標本―埋葬語法の精神分析』港道隆、森茂起、前田悠希、宮川喜美子訳、法政大学出版社、二〇〇六年。この書こそ、港道隆氏からの提案により、大学院科目の共同担当によって院生たちとともに購読し、後に翻訳出版にいたったものである。私の脳裏には、この書に取り組み始めたときの港道氏の歯切れのよい議論、気力に満ち溢れた授業の進行風景がありありと浮かぶ。思えばそれはデリダ存命中であり、氏の言葉の端々にデリダの存在が感じられたものである。

- (7) 森茂起編『埋葬と亡霊―トラウマ概念の再吟味』人文書院、二〇〇五年。

- (8) 同右、二頁。

- (9) American Psychiatric Association 『DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引き』日本精神神経学会監修、高橋三郎、大野裕監訳、医学書院、二〇一四年。PTSDの診断基準は、PTSDの改訂のたびに変更が加えられており、この概念自体が暫定的なものであることを示している。たとえば、第四版が採用してきた、外傷的出来事における「強い恐怖、無力感または戦慄」という条件は第五版では廃されている。「性的暴力」が明記されたのは第五版がはじめてであり、恐怖や戦慄は、条件ではなく症状の中に、「持続的な陰性の感情状態（例：恐怖、戦慄、怒り、罪悪感、または恥）」

- と記されている。上記二つに並んで「怒り」「罪悪感」「恥」が併記されることで、外傷的事態が生み出す広範な作用を包含しうるものとなっている。数回の改訂を経て、より精密な方向に改訂されてきたものの、今後の研究でさらに改訂が加えられる可能性は高い。そもそも、外傷的出来事の範囲を診断基準上で限定することへの批判も存在する。範囲を定義するA基準を廃すべきとする議論については、次の文献を参照。Brewin, C. R., Lanius, R. A., Novac, A., Schnyder, U., & Galea, S. Reformulating PTSD for DSM-V: Life after criterion A. *Journal of Traumatic Stress*, 22, 5, 2009, 366-373.

- (10) 次の文献を参照。岡野憲一郎『外傷性精神障害』岩崎学術出版社、一九九五年、一九二―二〇九頁。

- (11) この意味で、『表皮と核』の日本語訳（注5参照）が一昨年出版されたことで、二人の仕事を議論する準備が整ったといえよう。この書は、『狼男の言語標本』と並ぶ代表作でありながら、長く日本語訳が存在しなかった。狼男の症例に集中する『狼男の言語標本』と異なり、この書には、さまざまな主題にわたる二人の主論文が収録されており、フロイトとフレンツィそれぞれの仕事との関連をはじめ、精神分析の文脈の中で彼らの仕事を吟味する際に欠かせない著作である。

- (12) 人間科学研究所を準備し運営する過程で、私を含む精神分析、心理療法専門のスタッフの存在が港道氏の思想の発展に貢献できた

- ことを願う。また、港道氏との共同研究において、応答を求められ、私の応答に対する応答をいただく機会を得たことに感謝している。港道氏の業績を振り返るとき、その発展に精神分析が果たした役割の大きさを感じざるを得ない。私のこの小論も、その経緯と主題からして、港道氏に問ひかけ、港道氏からの応答を待つために書かれるのが本来である。非力を顧みずこのような主題について書くことになったのも、港道氏からの応答がほしいからである。それにしても、「亡霊」を主題とする論を追悼号に書くこと自体に強い躊躇がある。あまりにも符合する現実に対して不条理感を禁じえないからであり、港道氏の直接の応答を期待しながら書くべきであったという悔いに圧倒されるからである。それが許されたはずのときから、まだほんのわずかしか時間は経っていない。
- (13) cryptを埋葬室、のちに登場する cryptomym を埋葬語とする二つの訳語は、注(6)で述べた講読授業において生まれた。
- (14) アブラハムとトロークの略歴は、以下の拙稿を参照。「解説」『狼男の言語標本』、二五九―二六六頁。
- (15) アーネスト・ジョーンズ『フロイトの生涯』（新装版）竹友安彦、藤井治彦訳、紀伊国屋書店、一九八二年。
- (16) フェレンツイが晩年に精神の破綻を来していたとするもの。
- (17) マイケル・バリント『治療論からみた退行―基底欠損の精神分析』中井久夫訳、金剛出版、一九七八年。この著作、および、そこに組み込まれた諸論文の多くの部分が、フェレンツイの実践の再考、再評価のための議論である。
- (18) 「解説」『狼男の言語標本』、二六六―二六九頁。
- (19) 『表皮と核』四一九頁。
- (20) シャーランドル・フェレンツイ『精神分析への最後の貢献―フェレンツイ後期著作集』森茂起、大塚紳一郎、長野真奈訳、岩崎学術出版社、二〇〇七年、一三九頁。
- (21) ここでは詳述できないが、PTSDにおいても、その外傷的作用の核に、「秘密」がかかっていることは少なくない。症状の背後に恥が大きく作用している場合である。
- (22) Gottfried Fischer & Peter Riedesser, *Lehrbuch der Psychoanalytologie*. 3. Auflage, Ernst Reinhardt Verlag, 2003, p. 375. (筆者訳)
- (23) フロイトが晩年に外傷論を深めていったことが知られているが、最晩年の『モーセという男と一神教』において到達した外傷理解は、「抑圧されたものの回帰」の確認であった。次の文献を参照。岡野憲一郎『外傷性精神障害―心の傷の病理と治療』岩崎学術出版社、一九九六年、港道隆、森茂起『アナロジの帰趨―トラウマ』の引用符（上）『思想』、第一〇四九号、二〇一一年、七九―一四四頁、（下）第一〇五〇号、二〇一一年、九一―一二六頁。
- (24) 『精神分析への最後の貢献』一三九頁。
- (25) ヨーゼフ・ブロイアー、ジークムント・フロイト『ヒステリー研

究(上)』金関猛訳、筑摩書房、二〇〇四年、一八頁。

(26) 『臨床日記』には、想起を目指す治療の試みの数々が記されている。シャーンドル・フェレンツイ『臨床日記』森茂起訳、みすず書房、二〇〇〇年。

(27) 「ハムレットの亡霊、あるいは『真実』の幕間に続く第六幕」『表皮と核』四八九―五二二頁。

(28) *Haunted Subjects*: 76-92.

(もり しげゆき／臨床心理学)